コルシカ語の音韻的特性について

Sopr'e specialite funètiche ed u grafismu di a lingua corsa

長谷川　秀樹
Hideki HASEGAWA

0 :コルシカ語とは

コルシカ語はフランス領の地中海の島、コルシカの言語である。イタロ・ロマンス系の一言語、特にトスカーナ方言など中部イタリア方言群の一つと位置づけられることが多い（DALBERA-STEFANAGGI[2002:3],ARRIGHI[2002:ii,iv],SIBILLE[2000:31]）。1970 年代まではコルシカ方言（dialettu corsu）と呼ばれることが多かったが、以降はコルシカ語（lingua corsa）と呼ばれている。[1] 使用可能人口はコルシカ島内、ならびにコルシカ出身者が多数居住しているフランス本土をあわせて26万人程度とされている。[2] フランスの地域語（*langues régionales*）の一つであるが、地域語とは法的に地位を付与されている言語ではない。[3] かろうじて学校での教育やテレビ・ラジオでの放送が認められており、コルシカ語については 1974 年に法律によって学校教育が認められるようになった(MARCHETTI[1974:v-vi])。

だが、実際に学校教育が開始されたのはそれから 9 年後の 1983 年の新学期（9 月）からであった(FUSINA[1994:221-224])。許可から教育開始まで時間がかかったのは、コルシカ語は地域的に音韻体系が異なるという特性があり、また、そうした音韻体系をどのように表記するか、すなわち、南フランスのオック語のように地域別に異なる書記法を導入するか、それとも統一的な正書法を用いるかという問題があったからである。

少数言語、特にそれの教育や放送を通じた復興には、書記法という問題が立ちはだかる。書記法が確立していないと、円滑的な教育が行えないし、新聞や出版物を発行しても読むことはできない。少数言語は地域的ヴァリエーションを抱えるケースが多く、この問題は、コルシカ語だけに限定されたものではない。よって、本稿では、コルシカ語の地域的ヴァリエーションである音韻体系とその書記法について述べることとする。

1 :これまでのコルシカ語研究について

1-1 :イタリアとフランスによる言語調査

コルシカ語についての研究は、衒学的なものを含めれば既に中世から見られるが、近代の言語学的手法を用いた現地調査を踏まえた研究としては、第一次大戦中の 1914 年から 15 年にかけてのジリエロン(Jules Gilliéron)とエドモン(Edmond Edmont)によるものがはじめてである。彼らはコルシカに先立ってフランス本土全域におよぶ方言調査を既に終了し、『フランス言語地図集（*ALF=Atlas linguistique de la France*）』を発行しており、コルシカでの言語調査はその補遺版『コルシカ言語地図集（*ALC=Atlas linguistique de la Corse*）』を刊行するためであった(DELBERA-STEFANAGGI[2002:63-64],MARCHETTI[1989:28-29])。

ジリエロンとエドモンの言語調査・研究は当時のフランスで高く評価されたが、イタリアでは非難の対象となった。彼らのコルシカ語の音韻表記には「鼻母音」を示す符号（~）が付されていたためであった。鼻母音はフランス語にはあるがイタリア語にはない。イタリアにはコルシカの領土回収を要求するイレデンティスモがイタリア統一時から見られ、その回収を正当化するために言語文化的な一体性を掲げる傾向がみられる。コルシカ語に「鼻母音」があるとするジリエロンたちの研究は、コルシカとイタリアの言語文化的一体性を覆し、音韻論的にコルシカ語とフランス語の近親性を示すものとイタリア側に受け取られたことが、非難の理由であった(長谷川[1999:460])。

フランスに対抗して1930年代、イタリア側のコルシカ語調査が開始される。それは、ジーノ・ボッティリョーリを代表とするファシスト言語学者からなる調査団によるものであった。彼らの研究結果は『コルシカ島におけるイタリア語およびイタリア民俗地図集（*ALEIC=Atlante linguistico etnografico italiano della Corsica*）』として1930年代末に刊行された(DELBERA-STEFANAGGI[2002:65],MARCHETTI[1989:29-30])。

1-2 :コルシカ島内におけるコルシカ語研究—地域主義と自治主義の対立

戦前のフランス、イタリア両国のコルシカ語調査は言語地理学的方法を用いたという点では共通するが、それは、コルシカ領有をめぐる政治的色彩の極めて強い研究であったと言える。そしてこの時代にはコルシカ方言文学運動の高まりもあって、コルシカ島内でも次第に言語学的な手法を用いた言語研究が見られるようになるが、やはり、政治的背景を強く受けた対立を含む研究であった。[4)]

そしてその対立は、言語そのものに、特にコルシカ語の書記法をめぐる部分にも反映された。1920年以降、島ではアリギ(Paul Arrighi)、ボニファシオ(Antoine Bonifacio)を代表とする「地域主義（régionalisme）」とロッカ(Petru Rocca)、イヴィア＝クローチェ(Hyacinthe Yvia-Croce)を筆頭とする「自治主義(autonomisme)」の対立が起こる。その背景や活動など微細な点は既に他の論考で記しているのでここでは省くが、[5)]「地域主義」は政治的には共和主義、すなわちフランス共和国の一地域として現状を肯定する立場であるのに対して、「自治主義」は、大幅な自治権、独立、あるいはイタリアへの回帰を掲げる立場をとっていた。そして「地域主義」の提示するコルシカ語書記法（ボニファシオ書記法）はフランス語に、「自治主義」の提示する書記法（カルロッティ書記法）はイタリア語に近似していた(*A Muvra*, 21-28 aprile 1935, 長谷川[2002:iii])。

1-3 :戦後のコルシカ語研究

戦後、とりわけ1950年代以降、急速な都市化によりコルシカ語が衰退し、1960年代以降、コルシカ語を母語とする島民はいなくなった。50年代後半からコルシカ語の学校教育を求める運動が展開されるが、戦前のイタリア派、フランス派の対立は政治的な思想からは離れたとは言え、なかなか解消できなかった。統一したコルシカ語の書記法がようやく本格

的に模索されたのは、1960 年代の後半、戦前の対立を直接経験していない次世代の言語学者や詩人、教員たちであった。

フジナ(Jacques Fusina)、ティエール(Jacques Thiers)、マルケッティ(Pascal Marchetti)、マルセレジ(Giacomo Marcelesi)、ダルベラ=ステファナッジ(Marie-José Dalbera-Stefanaggi)らがその活動の中心であったが、書記法の確立は困難を極めた。それは、コルシカ語に見られる音韻的特徴によるところが大きかった。よって、戦後のコルシカ語の研究の中心は、その音韻的特徴を明らかにすると同時に、これに適した書記法、さらに教授法を確立することにあった。

2:コルシカ語の音声変化

以上述べたように、1960 年代以降のコルシカ語教育運動において、その前提となる統一的な書記法の確立が模索された中で最も困難であったのは、地域によって音韻体系が異なっているコルシカ語をどのように書記法に反映させるかという問題であった。本章ではまず、問題となったコルシカ語の音韻論的特徴について述べることにする。

2-1:スクンスナドゥーラとその条件

スクンスナドゥーラ（scunsunatura, *alternance consonantique*）(COMITI[1996:49])は、単語が文中で用いられている場合において、ある条件により特定の子音が有声化、無声化、あるいは半母音化する現象である。

コルシカ語の子音が音声変化する条件は、*Après Va*、つまりフランス語で *Après voyelle atone*（前の単語の語尾が無アクセント母音である場合）、次に続く単語の語頭の子音が音声変化する。

例えば、「犬」、「パン」という二つの単語を用いてこの条件とスクンスナドゥーラについて説明しよう。「犬」は単語としては[k'anɛ][6]、「パン」は[p'anɛ]と発音される。だが、*Après Va* 条件下では、例えばそれぞれの単語に男性定冠詞単数形の[u]がついて、「その犬」、「そのパン」という意味を表す際には、[k'anɛ]は[uk'anɛ]ではなく[ug'anɛ]、[p'anɛ]は[up'anɛ]ではなく[ub'anɛ]と発音される。つまり、この場合、*Après Va* の条件下で単語の語頭にある[k]が[g]に、[p]が[b]に音声変化する現象をスクンスナドゥーラと呼ぶのである。ここであげた事例はすべて無声子音が有声化する現象で、後に触れるように有声子音が無声化、ないしは半母音化する現象もある。

だが、「犬」や「パン」の最初の子音は文中で用いられていても、常に音声変化するとは限らない。

特に *Après PVtC* 条件、すなわちフランス語で *Pause*（文や節の最初に来る場合）、*Voyelle tonique*（前の単語の語尾がアクセント母音であるとき）、*Consonne*（前の単語の語尾が子音であるとき）下では変化しない。

再び、「犬」と「パン」という二つの単語を用いて事例説明しよう。「三匹の犬」、「三つ

のパン」は、それぞれの名詞に「三」という数詞[tr'ɛ]が前に来て「犬」、「パン」はそれぞれ[k'ani]、[p'ani]と複数辞に語尾変化する。しかし、「三」[tr'ɛ]はアクセント母音でおわるため、「三匹の犬」は[tr'ɛg'ani]ではなく[tr'ɛk'ani]、「三つのパン」は[tr'ɛb'ani]ではなく[tr'ɛp'ani]と子音の音声変化は生じない。

2-2 :音声変化する子音の対応関係

今述べたように、*Après Va* 条件で[p]は[b]に、[k]は[g]に有声化することが把握できよう。[p][k]はともに無声閉鎖音(*occlusif sourd*)[7]で、上記条件下で口蓋および舌の形態や位置が変わることなく有声化、すなわち[b][g]の有声閉鎖音（*occlusif sonore*）に変化する。では、他の子音についても音声変化で同様の対応関係が見られるのであろうか。

2-2-1 : 無声子音の有声化

まず、[p][k]と同じ無声閉鎖音である[t]も同様に Après Va 条件で有声閉鎖音[d]に変化する。

cf.「塔」[t'ɔra] ⇒「二つの塔」[d'uid'ɔrɛ]

また、すべての無声破擦音（*affriqué sourd*）、すなわち、[ts]、[tʃ]、さらにコルシカ語特有の音韻である[c]も、*Après Va* 条件下で有声化が見られる。[ts]は[dz]、[tʃ]は[dʒ]、そして[c]は[ɟ]という有声破擦音（*affriqué sonore*）へのスクンスナドゥーラが起こる。

cf.「子ども」[tsid'ɛlu]⇒「この子ども」[kʷ'ɛstudzid'ɛlu]
「空」[tʃ'ɛlu]⇒「その空」[udʒ'ɛlu]
「（わたしは～を）呼ぶ」[c'amu]⇒「わたしの名前は～である」[miɟ'amu]

無声摩擦音(*fricatif sourd*)については、[f]と[s]は同様の条件で有声摩擦音(*fricatif sonore*)、つまり[v]、[z]に音声変化する。ただし、[ʃ]はいかなる条件下でも有声音[ʒ]には変化しない。

cf.「（私は）フランス人です」[s'ɔfrantʃ'ɛze]⇒「フランス語」[uvrantʃ'ɛze]
「聖人」[s'antu]⇒「二人の聖人」[d'uiz'anti]
「科学」[ʃ'ɛ̃ntsa]⇒「社会科学」[eʃ'ɛ̃ntsezudʒi'ale]（[ʃ]は変化しない）

2-2-2:有声子音の無声化あるいは半母音化

逆に有声子音が無声化、あるいは半母音化するスクンスナドゥーラもある。条件は有声化と同じ Après Va である。無声化は[b]および[g]を語頭に持つ単語で、次に子音[r]が続く場合である。下記に事例を示す。

cf.「ブローッチュ」[8] [brˈɔtʃu]⇒「(私は) ブローッチュが好きだ」['amuurˈɔtʃu]
「小麦」[grˈanu]⇒「小麦は主要な作物だ」[urˈanuˈɛupruwˈutiprĩntʃibˈale]

つまり、ここでの無声化とは、有声子音の無声子音への変化ではなく、[br-]、[gr-]を語頭にもつ単語が Après Va 条件下で[b]および[g]が脱落し、[r]のみになる現象を指す。

一方、「半母音化」とは Après Va 条件下で、特定の子音が[j]もしくは[w]に変わる現象を指す。

cf.「船」[bˈatēlu]⇒「その船」[uwˈatēlu]
「ワイン」[vˈinu]⇒「(私は) ワインが好きです」['amuuwˈinu]
「のど」[gˈɔla]⇒「わたしののど」[miawˈɔla]

Après Va 条件下で、[w]に半母音化するのは、[b]、[v]および[g]である。

cf. 「木曜日」[ɟˈɔwi][9]⇒「毎週木曜日」[ujˈɔwi]

Après Va 条件下で、[j]に半母音化するのは、[ɟ]である。

3:北部と南部の音韻（音声）対立

コルシカ語の書記法の確立が困難であったのは、第 2 章にて述べたスクンスナドゥーラはもとより、島の北部と南部の音韻もしくは音声の対立にあった。コルシカ言語学では一般に、島は北部、中部、南部という音韻体系の差異により 3 つの *régiolecte*（地域的な音韻体系）に分類されている（COMITI[1996 :16],FUSINA[1999 :49]）。だが、南部は島の最南端部分（ボニファシオ地方）に限定され、南隣のサルデーニャ島北部のガルレーゼ（ガルーラ方言）との類似性が指摘され、さらにはコルシカ語とは異なる「ボニファシオ語」であるとする説もある(SIBILLE[2001 :31])。

本稿、とりわけ第 3 章では、ひとまず「ボニファシオ語」の説を受け入れる形で、さきにのべた中部音韻体系については「南部」、北部音韻体系を「北部」として、この対立関係について論じることにする。

3-1:語中における子音の有声／無声対立

まずコルシカ語の音韻論に見られる第二の主要な特徴としてあげられるのが、一つの単語の語中における子音の有声／無声の対立である。「北部」は有声であるのに対し、「南部」は無声であることが多い。以下に事例を幾つか示して説明しよう。スラッシュの前の音声記号は北部のものを、後の記号は南部のものを指す。

cf. 「野ネズミ」[t'ɔbu]/[t'ɔpu]
「きぬ」[s'εda]/[s'εta]

つまり、同一の単語であるにもかかわらず、北部では、その語中にある音韻は有声（[-b-]、[-d-]）であるが、南部は無声（[-p-]、[-t-]）と対をなしていることが分かる。またこの対立は、スクンスナドゥーラの生じる前と生じた後との子音の音声変化と同じものとなっている（他にたとえば「中くらいの」[m'εdzu]/[m'εtsu]、「平和」[p'adʒe]/[p'atʃi]という[-dz-]/[-ts-]、[-dʒ-]/[-tʃ-]の対立がある（ただし、この対立関係はすべてにおいて見られるわけではない。通常コルシカ語の同一子音は「緊張音 *tendu*」と「弛緩音 *relâché*」に分けられるが、この対立は「弛緩音」のみに該当する。音標文字でコルシカ語の緊張音は通常[p̄]、[t̄]などのように表記されるが、この場合は北部と南部の有声／無声の対立は見られない。）。さらに、足[p'εwe]/[p'εdi]という半母音／有声子音という対立（[-w-]/[-d-]）もある。ただし、スクンスナドゥーラとは異なり、[-z-]/[-s-]という有声／無声の対立や[-ɟ-]/[-j-]という有声／半母音の対立は見られない。

cf. 「月」[m'εze]/[m'εzi]
「1 月」[ɟēn'aɟu]/[ɟēn'aɟu]

3-2:bétacisme

コルシカ語の北部と南部に見られる子音の音韻対立は、3-1 に述べた「有声」と「無声」の対立の他にも幾つか見られるが、典型的な現象を一つだけ取り上げると *bétacisme*、すなわち子音[v]と[b]を混同するか、区別するか、という対立である（COMITI[1996 :23]）。下記に事例を幾つか示す。スラッシュの前が北部の音韻を、後が南部の音韻を示している

cf. ワイン　[b'inu]/[v'inu]
古い　[b'εc̄u]/[v'εc̄u][10)]

フランス語やイタリア語との比較（*vin, vino*…ワイン、*vieux, vecchio*…古い）からわかるように、ロマンス語では上に掲げた二つの単語は通常、[v]となる。コルシカ語の南部での音韻もこれに同じである。しかし北部では[v]と[b]の混同が生じている。ただし、コルシカ語は北部音韻体系も含めて、[v]の音韻が欠落しているわけではない。第 1 章のスクンスナドゥーラで、[f]が *Après Va* 条件下で[v]に有声化するという事例があり、このことから説明できるであろう。

3-3:「スクンスナドゥーラ」と地域的音韻体系

さらに、第 2 章で言及した「スクンスナドゥーラ」は、北部では顕著に見られるのに対

して、南部ではあまり顕著ではない、という対立がある。「ボニファシオ語」とされる島の最南端地方では、スクンスナドゥーラは生じない。これについては下記の図表を参照されたい。

南部でもスクンスナドゥーラが生じる音声	[f]、[s]、[k]（有声化）
	[v]、[ɟ]、[g]（半母音化もしくは欠落）
南部ではスクンスナドゥーラが生じない音声	[p]、[t]、[ts]、[tʃ]、[c]（有声化）
	[b]、[d]（半母音化もしくは欠落）

（長谷川作成）

例えば、家族[fam'iʎa]、兄弟[frat'ɛl̄u]について定冠詞を付けて発音する場合は、北部も南部も[avam'iʎa]、[uvrat'ɛl̄u]と音声変化するが、足[p'ɛ^{w}e]やパン[p'ane]は、定冠詞が付いても音声変化するのは（[ab'ɛ^{w}e]、[ub'ane]）北部のみで、南部は[ap'edi]、[up'ani]と音声変化しない。

4:コルシカ語の書記法の特徴―イタロ・ロマンス系言語への接近とコルシカ語の統一性、独自性の両立

コルシカ語の書記法は 1970 年代末にようやく一定の統一的形態をもつようになったが、これまでに述べた音韻的特徴を反映する形で、書記法は次の三つの原則に基づいている。それは、①イタロ・ロマンス系諸言語への接近、②イタロ・ロマンス系の枠組みの中でコルシカ語の独自性を相対的に確立すること、③コルシカとしての統一性を保つこと、である。

4-1:イタロ・ロマンス系言語への接近

これについては、戦前から追及されていた。一部の前置詞表記などについては戦後、イタリア派が掲げていた書記法（カルロッティ書記法）をフランス派のもの（ボニファシオ書記法）に変えた時期もあったが、現在では、特に子音表記についてはイタリア語に近いものを採用している。下記対応表を参照されたい。

子音表記	b	c(a, u, o)	c(i, e)	d	f	g	l	m	n
対応音声	[b]	[k][**g**]	[tʃ][**dʒ**]	[d][**w**]	[f][**v**]	[g]	[l]	[m]	[n]

子音表記	p	qu	r	s	t	v	z
対応音声	[p][**b**]	[k^{w}]	[r]	[s][**z**]	[t][**d**]	[v][**w**][b]	[ts][**dz**]

子音表記	gn	sc (i,e)	ch(i,e)	gh(i,e)	gl
対応音声	[ɲ]	[ʃ]	[k][**g**]	[g]	[ʎ][ɟ]*[d̄]**

(長谷川作成。ゴシック表記はスクンスナドゥーラによって音声変化した場合をさす。補助的な表記および音声は略した。*は島中部の、**は島南部の音声である)

前ページの表が示しているように、スクンスナドゥーラによる音声変化は書記法には反映されないシステムとなっている。たとえば、「パン」は単独で用いられる場合は[p'ane]と発音され（南部も北部も）、pane と書かれる。これはイタリア語に同じである。単数定冠詞の u[u]が付いた場合は、北部は[ub'ane]と音声変化がおきるが、書記法は u bane とはならず、u pane となる。これは、イタロ・ロマンス性を保つと同時に、後述するように、南部と北部との書記法の違いによる「分断」を回避するためである。

4-2:コルシカ語に独自の書記法

一方、相対的なイタロ・ロマンス性を掲げながら、コルシカ語には他の言語にはない独自の書記法を幾つか採用している。一つは sgi と sge の書記法である。具体例を以下に掲げる。

camisgia [kam'iʒa]シャツ、arcusgiu[ark'uʒu] 火縄銃、sgio [ʒ'ɔ] ～さん（男性敬称）
cosge [kɔʒ'ɛ]縫う

sgi と sge はいずれも[ʒ]の音韻を表示している書記法であるが、このシステムは標準イタリア語にはない。sgi と sge が[ʒ]という書記法は一見、突拍子もないように見える。しかし、ci と gi、ce と ge がそれぞれ[tʃ]と[dʒ]という無声／有声という対立関係に対応しており、これを援用する形で sci と sce が[ʃ]（これは明らかにイタリア語のシステムをそのまま援用したものである）、sgi と sge は[ʃ]が有声化した[ʒ]という対立関係に対応している、と考えれば、この書記法は合理性に基づいていることが分かるだろう。

もう一つは、chj ならびに ghj の書記法である。これも、コルシカ語以外には見られない書記法である。次にまず事例を示す。

chjamà[cam'a]呼ぶ、訴える、vechju[b'ɛcu]古い、chjosu[c'ɔzu]閉まっている
ghjurnale[ɟurn'ale]新聞、ghjennaghju[ɟɛ̃n'aɟu]一月、ghjornu[ɟ'ɔrnu]日、

上記のコルシカ語に対応するイタリア語は、*chiamare, vecchio, chiuso, giornale, gennaio, giorno* であるが、イタリア語の chi がすべてコルシカ語の chj に、gi が ghj に対応するわけではない。特にイタリア語の gi については、日本 *Giappone*、黄色い *giallo*、喜び *gioia* は、コルシカ語でも Giappune[dʒap'une], giallu[dʒ'alu], gioia[dʒ'ɔja]となっていて、コルシカ語では明確に chi と chj、gi と ghj が音韻として区別されている。また、イタリア語では chi と gi は音声の対立関係にはないが、コルシカ語の chj と ghj は口蓋破擦音（*palatal affriqué*）の音声対立関係にある。

4-3:南北の音韻対立をいかに表記するか

最後に、南北の音韻対立、特に 3-1 で示したスクンスナドゥーラによらない、音声変化によるものではない有声／無声の音韻対立についてであるが、これもまた、スクンスナドゥーラと同じく、南北別の書記法を用いるのではなく、統一的な書記法を導入している。つまり、3-1 の事例を再び用いれば、「野鼠」は北部では tobu、南部では topu と書き分けるのではなく、topu と南部音韻体系に従った書記法を採用している。これは、イタリア語やラテン語が b ではなく p を用いているためである。「絹」もまた同様に南北双方 seta と表記される。

「家族」は北部では[fam'iʎa]、中部では[fam'ija]、南部では[fam'ida]とそれぞれ異なった音韻体系を持っているが、いずれも famiglia と表記されている。

結論と課題

以上の論述を締めくくると、ロマンス語におけるコルシカ語の音韻ならびに書記法の特徴は、同一単語において北部と南部の有声／無声という音韻対立がみられるのに対し、これを表記する書記法が統一性の志向を持ち、その際にイタロ・ロマンス系諸言語の書記法が参照の対象となっているということである。ただし、統一性を必要としない場面においては、コルシカ語の独自性が強調され、書記法にもそれが現れている。

だが、コルシカ語の書記法はまだ確定的ではない。それは、先に述べた、ボニファシオ語の存在である。これまでの論述の対象はほとんど北中部のコルシカ語についてであった。最南端部の言語は、語彙の面でも北中部とは異なるものが多く、同一語彙とされている単語の中にも母音の音韻体系が異なっていて、統一的な表記法ではいかんともしがたいケース[11]が見られる。

---

1) 「コルシカ方言」とは、フランス語ではなく、イタリア語の方言、という意味である。「コルシカ方言」および「コルシカ語」については、FUSINA[1994], THIERS[1989], MARCHETTI[1974]を参照。

2) コルシカ語話者人口についてはさまざまな数値がある。ロラン・ブルトンによれば、1981 年の時点で約 30 万人としている（ブルトン[1988:109]）。田中およびハールマンは 1980 年の時点で島内に 12 万人、フランス本土に 7 万人の話者人口がいると推計している（田中・ハールマン[1985:190]）。フランスの全国紙『リベラシオン』（Libération）が 1999 年に組んだ「地域語特集」では、10～15 万人（http://www.liberation.fr/languesregio/index.html）、SIL international が発行している「世界の言語（Languages of the World）」では、1971 年の数値として 31 万人と推計している（http://www.ethnologue.com/show_language.asp?code=COI）。

3)1951 年にブルターニュ語やオック語などの言語を学校で教えることを認めるいわゆる「ディクソンヌ法（loi Deixonne）」が制定されているが、これは地域語の概念その地位について言及したものではない。地域語およびディクソンヌ法についての詳細については、長谷川[2002:144-151]、ジオルダン[1987]、原[1997]、三浦[2001]等を参照。

4) 詳細は FUSINA[1994],MARCHETTI[1989],ARRIGHI[2002]等を参照。

5) 長谷川[1998:5-23],[1999],[2002:30-32]を参照。

6) 「犬」は cane と ghjacaru の二通りの語彙があり、いずれの方を用いるかは地域によって異なる。DALBERA-STEFANAGGI[2002:61]の分布図参照。なお、音声記号はすべて DALBERA-STAFENAGGI[1995]に従った。

7) コルシカ語の音韻分類についてはすべて DALBERA-STEFANAGGI[1978:24]に従った。

8) コルシカのヤギのフレッシュチーズ。

9) [j]の表記が不可能である場合は、[dj]と表記されることが多い（FUSINA[1999:63],COMITI[1996:53]）が、

実際には[dj]、[ʒ]および[gj]を混合した、あるいはそのいずれにも聞こえる音声である。
[10]注釈 9)にて[ɟ]の変わりに[dj]を用いた場合は、[c]は[tj]を用いることになっている。[tj],[tʃ],[kj]を混合した、あるいはそのいずれにも聞こえる音声である。
[11]たとえば「ヨーロッパ」は最南端部を除き[eur'ɔba]もしくは[eur'ɔpa]と発音され、Europa と表記されるが、最南端部では[aur'ɔba]と発音される。「彼ら」は最南端部以外では['ɛl̄i]と発音され、elli と表記されるが、最南端部では['iḏi]もしくは['iḏj]と発音される。最南端部をボニファシオ語であるとする立場では、この二つの単語の表記は Auropa, illi となっている。

参考文献

A Muvra, 21-28 aprile 1935
ARRIGHI,Jean-Marie 2002 *Histoire de la langue corse*, Jean-Paul Gisserot
COMITI, Jean-Marie 1996 *A pratica è a grammatica*, Squadre di u Finusellu et Centru Culturale Universitariu
I Culioli 1998, *Dictionnaire français-corse corsu-francese*, DCL Editions
DALBERA-STEFANAGGI,Marie-José,1978 *Langue corse, une approche linguistique,* Klincksieck
_____, 1991 *Unité et diversité des parlers corses*, Edizioni dell'Orso
_____,1995 *Nouvel atlas linguistique et ethnographique de la Corse, Vol.1.* CNRS
_____,2002 *La langue corse*, Presses universitaires de France
FUSINA,Jacques1994 *Enseignement du corse : Histoire, développements perspectives*, Squadra di u Finusellu
_____,*1999 Parlons corse*, l'Harmattan
MARCHETTI,Pascal 1989 *La corsophonie: un idiome à la mer*, Albatros
_____,1974 *Le corse sans peine*, Assimil
SIBILLE, Jean 2000 *Les langues régionales*, Flammarion
THIERS, Jacques 1989 *Papier d'identité(s),* Albiana
アンリ・ジオルダン（原　聖訳）1987『虐げられた言語の復権』批評社
長谷川秀樹 1998「生成される少数言語」『立命館言語文化研究』9-4 pp.5-23
同　　1999「戦間期コルシカの自治主義・地域主義運動」西川長夫・渡辺公三（編）『世紀転換期の国際秩序と国民文化の形成』柏書房 pp.455-475
同　　2002 『コルシカの形成と変容ー共和主義フランスから多元主義ヨーロッパへ』三元社
原　聖　　1997「フランスの地域言語」　三浦信孝（編）『多言語主義とは何か』藤原書店
ロラン・ブルトン（田辺裕・中俣均共訳）1988『言語の地理学』白水社
三浦　信孝 2001「共和国の言語、フランスの諸言語」三浦　信孝（編）『普遍性か差異かー共和主義の臨界、フランス』藤原書店 pp.217-236
田中克彦、H・ハールマン　1985　『現代ヨーロッパの言語』岩波書店